

早稲田大学水泳部寮の伝統・文化 Domestic culture of waseda university swimming club dormitory

1K09B029-1 江崎 大地
指導教員 主査 寒川恒夫 先生 副査 瀬戸邦弘 先生

【はじめに】

早稲田大学水泳部は全寮制であるので、入学と同時に入寮した。早稲田大学水泳部寮に入寮してから、それまでとは180度違う生活になった。というのも、高校生までは実家暮らしで、炊事、洗濯などは全て親がしてくれていた。しかし、寮生活では全て自分でしなければならない。また、鹿児島県出身の私は、上京するということが不安がたくさんあった。しかし、ホームシックになる間もないほど忙しく、厳しい新生活が始まった。

その後、OBの方と話をするうちに、昔と今とは少し寮のルールが違うということを知り、それを含めた時代による寮の規則の変化など、調べてみたいと思うようになった。また、他の部活動の友人と話をするなかで、部活動によって寮の文化、規則などが全く違うということに興味を持った。稲泳寮は現在早稲田大学所沢キャンパスの近くにあるのだが、それ以前は東伏見にあった。東伏見から所沢に移ったことによる規則の変化や、そこから今現在の稲泳寮の環境になるまでの経緯に関してまとめることを目的とした。

【第一章 早稲田大学水泳部について】

早稲田大学水泳部の創部は1905（明治38）年7月である。当時水泳部を作るのには、ずいぶん苦労したという。部として公認されたのは、1910（明治43）年で野球、庭球、漕艇、剣道、柔道、弓道に続く7番目である。大正10年に早稲田の水泳がそのすべてを投入することになる第一回のインターカレッジ（全国学生水泳大会）が始まる。明大が16点で優勝、早稲田が10点で2位であった。大正11の第二回大会は多摩川調布の百メートルのプールで举行され、早稲田が32点で初優勝、明大が23点で2位であった。

1924年パリ・オリンピック大会に早稲田から初めての代表として高石勝男が出場、100メートル自由形5位、1500メートル自由形5位と二種目で入賞したことは日本水泳界のみならず、アジア全体にとって、画期的な出来事であった。高石はわが国で初めて、クロール泳法を完成させ、日本水泳界の先駆者となった。この活躍により、世界を目指す早稲田水泳の基盤ができ、部活動にも活気が出てきた。彼の活躍を記念して、第一学院内に25メートルの屋外プールを建設した。ホームプールができることによって、彼の練習にも一段と力が入り、次の年から次々と日本記録を更新。世界の高石に成長していくのであった。

水球においても早稲田は輝かしい記録を残している。19

24年（大正13年）に大日本水上競技連盟が設立されたが、水球関係者の情熱により、翌年には早くも第一回日本選手権が行われ、東京ウォーターポロクラブが優勝。早稲田は1926年（昭和1年）の第二回大会で初優勝し、1931年（昭和6年）から1934年（昭和9年）まで稲泳会として4連覇を果たした。

【第二章 稲泳寮について】

東伏見の稲泳寮は、昭和26年12月に完成した。部員、関係者の喜びはとてつもなく大きかった。合宿所ができるとその維持、管理は全て自分たちの手でやることになった。

平成3年より所沢にアクアアリーナが完成し長年水泳部が拠点としていた東伏見から移動。東伏見の寮は整備のため取り壊しが決まっており、当然残せるものは何もなく、必要なものは全て所沢の寮へ持っていくことになった。新人だけではなく、3年生も含めた全員が自分の持ち物の他に寮にある備品類の引越しに借り出された。

【第三章 平成7年度卒業の佐藤先輩インタビュー】

平成7年度卒業の佐藤先輩は水球部門出身である。佐藤先輩が1年生の9月頃、東伏見から所沢に移動した。佐藤先輩は東伏見と所沢の1年生をした、唯一の代である。この貴重な経験をされている、先輩からお話を伺うことで東伏見から所沢に移動してからの変化、そして現在との違いを見つけることができた。